論　文　の　和　文　要　旨

論文題目	バングラデシュのガロ社会における社会関係の重層性と 女性の生存戦略
氏名	上澤　伸子

本論の目的は、バングラデシュ中北部の災害常襲地域で暮らす、民族的にも宗教的にも少数派であるガロと呼ばれる人びと、とりわけ女性を対象として、少数民族としての「周縁性」を解消するために、女性としての「優位性」をいかに日常のなかで活用しているか、明らかにすることである。本論は、バングラデシュ中北部マイメンシン県の国境に近い村落において、2008 年から 2019 年までのあいだに実施した人類学的な調査にもとづき、地域の歴史を女性の視点でみる民衆史として記述した。

バングラデシュの少数民族に関する既存の研究では、少数民族の社会経済状況を示す際に、かれらは「主流の」人びとよりも「後進的」なために公的支援へのアクセスが制限され、貧困状態から抜け出せないと説明されてきた。ガロの人びとに関していえば、植民地期に「辺境の民」とみなされてきたことが、地理的・民族的な孤立を想起させ、いまなお「周縁性」のイメージが付与されている。しかし、じっさいにはクリスチャンであるガロの人びとは、英領期から今日まで海外の宣教団やミッション系 NGO による教育や保健の支援を受けてきた。ここで問わなければならない第 1 の問いは、彼ら・彼女らは周縁化された人びとだから広く支援が得てきたのか、あるいは「周縁性」というイメージを活用して支援を引き出してきたのかという点である。

ガロの人びとは、民族全体としては社会経済的な「周縁性」が強調されてきた一方で、ガロの女性たちは「母系制」や「女性の土地所有」といったフィルターを通して、ガロ社会において「男性と対等な立場にある」、「自律的」、「主体性がある」とみなされ、しばしば父系社会の女性たちとの比較の対象にされてきた。しかし、ガロ女性が生活すべての側面で「自己決定権」をもつわけではなく、状況に応じて女性が自由に動ける場や影響力をもつ場面とそうでない場面があり、また歴史的にも女性の置かれた状況は変化している。したがって、ここで解明の必要な第 2 の問いは、具体的にガロ女性たちが日常生活あるいはライフコースのどの部分で、何をきっかけに「自己決定権」を発動しているのかという点であろう。

そこで本論では、バングラデシュにおいて、少数民族を「てなずけよう」とする国家組織や教会組織、開発組織と交渉して、ガロ女性たちがどのような場面で「自己決定」し、複層的な社会関係を活用して、少数民族としての不利益を解消し、生活を持続、向上させようとしているか、ガロ女性の語りから明らかにする。それによって、ガロ女性たちが自覚的であれ無自覚であれ、少数民族としての「周縁性」と女性の「優位性」という矛盾した言説をいかに認識し行動しているか、明らかにすることにつながると同時に、ガロ女性に対するステレオタイプな見方を再構成することになるだろう。

本論は、序章に続き、第 1 章から第 7 章と終章から構成されている。序論では、上記の問題意識を提示したのち、「トライブ」、母系制、開発に関する先行研究の問題点を指摘し、それぞれの学問領域に固有の固定概念や潜在的な価値観に取り込まれないようするには、現地の人びとの声につねに立ち戻ることの重要性を指摘した。

第 1 章では、ガロの人びとの集住地域である中北部国境地域において、イギリス東インド会社およびイギリス植民地政府とその影響下にあった海外宣教団、パキスタン政府、バングラデシュ政府といった一連の政治・宗教体制が、少数民族に対して歴史的にいかなる政策をとり、かれらをどのように表象していたかを明らかにし、ガロの人びとが抱える問題を通時的に概観した。それらに加えて、中北部国境地帯では鉄砲水災害が頻発するが、政府による洪水予測や対策が遅れているため、貧困が常態化していることや、政府の洪水政策の欠如を補うために多くの NGO が活動していることを概説した。

第 2 章では、調査地域や村内の地理的な概要、集落の構成、および古老から聞いた村の成り立ちを示したのち、人びとの構成（人口構成、教育、生業、宗教、母系的な特徴）など、議論の基盤となるデータを提示した。

つづく第 3 章から第 5 章では、ガロの女性たちが問題に直面したときに、どのように国家組織、教会、NGO などの組織や、それを支える権力側の人びとに交渉して問題を解決しようとしているか、そこにガロ特有の解決方法があるのかを明らかにした。

まず第 3 章では、「母系制」の特徴がとりわけ顕著に表れる土地所有・相続を事例にとりあげ、政府の土地政策や農業経済構造の変容に加えて、私有地概念の生成、個人主義や平等主義といった価値概念の変容によって、ガロ女性の土地所有権が危機にさらされたときに、女性とその家族が、司法・官僚制度といった国家組織を相手にいかなる交渉を行なっているのかという点について論じた。ガロ同士の土地係争の事例をつうじて、土地所有をめぐる「母系制」の原則が崩れつつあるなかで、同時に、その揺り戻しが起きる経路を明らかにした。さらに、女性の交渉力や個人・家族の決定力が強まるにつれ、親族の役割が後退し、地方行政や NGO の介入がもたらされていることを指摘した。

第 4 章では、教会組織に焦点を当てながら事例を検討することによって、ガロ社会ではキリスト教が他宗教とのバウンダリーとして働くだけではなく、ガロ社会内部にも教派や男女のバウンダリーをつくり出していることを指摘した。とくに日常生活で意識される教会組織のジェンダー不均衡な状況に対しては、教会の女性リーダーが異議申し立てを行なってきたが、「ふつうの」女性信徒は教会のジェンダー問題に関心が低く、個々の女性によって、それぞれことなる教会の機能が期待されていることを事例から示した。

第 5 章では、NGO が組織する女性グループをとりあげ、各 NGO の特徴や女性グループの競合状況を示したのち、ガロ女性によるグループのさまざまな「利用」の仕方を記述した。ガロ女性と NGO スタッフ双方の視点から「開発」実践をみることによって、これまでの女性グループの自明性と、「参加」という開発言説の均質性という問題を再考した結果、第 1 に、高所得層の女性と低所得層の女性では NGO の「利用」の仕方が異なって

いることや、第 2 に、NGO 女性グループへの「非関与」はガロ女性の戦略であること、第 3 に、母系社会であることがグループ編成に影響していることが明らかになった。

第 6 章と第 7 章では、個々の女性の生活やライフコースにおいて、女性たちが他の人びととつながりながら、どのようにそれぞれの抱える問題に折り合いをつけているかを、母娘間と姉妹間の継承と変化に着目して記述した。

まず第 6 章では、調査村の経済的特徴がもっとも表れている大土地所有の給与世帯と、土地なしの日雇い農民世帯の事例をとりあげ、母娘の継承と変化という観点から分析した。その結果、女性たちのライフコースにおいて、状況に応じて社会関係を選択し、問題を解決していることや、社会関係の選択や活用の仕方は社会階層や世代によってことなるが、母と娘が相互に影響し合っていることを明らかにした。さらに、高所得層の事例でも低所得層の事例でも、家族の男性メンバーが女性の資源を間接的に用いている例を提示した。

第 7 章では、ガロ女性の都市就労に関して、ガロの人びとを少数派ならしめている「ガロであること」「クリスチャンであること」がかえって有利に働いて、美容師、家事使用人、看護師という安定した就労があることや、それらの就労は再度、民族性や宗教性と結びついて社会的な「周縁性」を固定化する可能性も否定できないことを示した。さらに、農村と都市のつながりについては、出稼ぎ女性は都市で働くことによって母系社会から断絶されるのではなく、上記のポストで得た資金を使って、農村の母系親族に仕送りをする、姉妹の姪を引き取る、村のイベントを支援するといった形で、農村の母系社会との関係を維持していることを明らかにした。

終章では、各章のまとめを示したのち、全体の議論を概括するとともに、今後の課題を提示した。少数民族は、貧しい、無力、後進的といったイメージから「周縁性」が強調され、保護的な扱いを受ける一方で、蔑視の対象にもなってきた。しかし、少数民族によっては、外部からの「周縁性」のイメージと実態とが乖離している場合がある。ガロ女性の場合は、少数民族に付与された他者表象を自己に取り込み、利用あるいは再利用していた。とくに低所得層の女性は文字どおりの「周縁性」を、高所得層の女性はイメージとしての「周縁性」を活用している。いずれの所得層の女性たちもそれによって、国家組織や教会、NGO と交渉し、国内の司法や官僚制度、グローバルなキリスト教組織、開発援助組織から支援を引き出している。これがガロ女性の生存戦略である。

これらの生存戦略を支える原動力のようなものが、ガロ女性の「自己決定権」と重層的な社会関係である。既存の研究では「母系制」というフィルターを通して、ガロ女性が「自己決定権」をもつという前提のもとで「優位性」が強調され、議論が展開されてきた。本論の事例からみえてきたのは、ガロ社会では生活のなかで自己決定を下す機会が多くあることである。もう 1 つの重要な点は、自己決定を下して何かに挑戦し、失敗したとしてもセーフティネットがあるということである。セーフティネットとはつまり本論で述べてきた親族や教会、NGO などの重層的な社会関係である。ガロ女性は、災禍や土地問

題などに起因するさまざまなリスクに対応するために、ガロ社会の縦横に張り巡らされた社会関係を活用してきた。それら複層的な社会関係を活用する行為そのものが、ガロ女性の「自己決定権」を発動させているのである。